研究ノート

全道樺太実業野球大会

会田理人

Key Words　社会人野球大会（Amateur baseball tournament between non-professional teams（company teams, club teams））、企業チーム（Company teams）、クラブチーム（Club teams）、北海道（Hokkaido）、樺太（Sakhalin）

1　はじめに

筆者はこれまでに、日本領南樺太（以下「樺太」）における野球の普及と野球大会開催の歴史に焦点を当てて、樺太日々新聞社主催の樺太全島野球大会の開催について『樺太日日新聞』記事に依拠して明らかにした（会田2015、2017）。同大会は、社会人・学生（旧制中学校）の垣根なく、樺太ナンバーワンの野球チームを決める大会として開催され、樺太の野球振興に大きな役割を果たした。

興味深いのは、樺太全島野球大会とは別に、北海道の小樽新聞社主催の社会人野球チームだけに出場資格が与えられた「全道樺太実業野球大会」に、樺太チームも出場枠を持っていた点である。この二つの大会は、まったく別の新聞社が主催する、別の野球大会であり、開催の経緯も不明な点が多い。

そこで本稿では、大正中期～昭和初期に、樺太も含めて、北海道で初めて社会人チーム限定の大会として開催された野球大会である「全道樺太実業野球大会」に焦点を当てて、北海道における社会人野球大会の開催に至るまでの経緯と大会の模様を明らかにしたい。

ここで言う社会人チームとは、いわゆるアマチュアチームのうち、リトルリーグや学生チームを除いたものをさす。かつては、「実業団チーム」とも呼ばれたが、本稿では、大会名称を除いては「社会人チーム」と表記することとする。また、特定の企業を母体とするものを「企業チーム」、特定の官公庁を母体とするものを「官公庁チーム」、特定の企業・官公庁を母体としないものを「クラブチーム」と表わすこととする。

北海道における野球の導入と普及、中でも高校野球に関しては、チームの盛衰や大会の推移については、多くの先行研究が発表されている。2018（平成30）年には、全国高等学校野球選手権大会（夏の甲子園大会）が100回を迎えることから、かつての中等学校野球大会や「外地」のチームを含めて、いわゆる「春と夏の甲子園大会」の歴史に関する先行研究等は枚挙にいとまがない。

しかしながら、北海道や樺太の社会人野球大会に目を転じてみると、広瀬（1958）や毎日新聞社北海道支社（1992）などが社会人野球大会の黎明期について簡単に触れてはいるが、社会人を対象にした野球大会が、どのように開催され、どれほど盛り上がったか、はっきりしない点が多い。本稿では、この点に焦点を当てて論を進めることとする。

なお、本稿は、基本資料として『小樽新聞』（北海道立図書館所蔵マイクロフィルム版）に依拠した。本文中に用いる「(『小樽新聞』○年○月○日)」の表記は、『小樽新聞』で記事が掲載された年月日を意味する。また、記事見出しの「／」は改行を示す。歴史的かなづかいは、原則として原紙のままとし、漢字は現行のものに改めた。

2　第1回全道実業野球大会開催に至るまで

北海道で最も古い社会人野球チームは、函館太洋倶楽部（函館オーシャン）で、創立は1907（明治40）年のことだった。その後、道内の各地で、社会人チームが次々に創立される（函館太洋倶楽部 1978；毎日新聞社北海道支社 1992；山本康三監修 2017）。

北海道で社会人野球チームを対象とした野球大会が開催されたのは、1920（大正9）年6月のことである。小樽新聞社が主催、北海道帝国大学及び小樽高等商業学校の両野球部が後援となり、小樽花園グラウンドを会場に「札樽実業野球大会」が開催された。

参加資格は、札幌・小樽両地区の居住者で組織された

表1　第1回札樽実業野球大会　出場チーム

小樽	内外軍、大正倶楽部、ユニオン軍
札幌	共和、札幌鉄道、遞友

『小樽新聞』1922年6月1日、6日付記事をもとに作成

会田理人：北海道博物館　研究部　生活文化研究グループ

チームに限られ、学校チームに出場資格はなく、学籍を有する者は出場不可とされた。各チームの選手登録は9人（各ポジション1人）に、補欠2人を加えた11人。監督1名も登録することが義務づけられた（『小樽新聞』1920年5月14日）。

大会には、札幌から3チーム、小樽から4チームの全7チームが出場申込を果たしたが、大会直前に小樽の1チームが棄権したため、6チームの出場となった（表1）。

６月5日午前8時、大会開催を告げる煙火が5発打ち上げられ、開会式が始まった。競技委員、各チームの監督・主将の立会のもと組合せの抽籤が行われた。その結果、第1試合は札幌鉄道対大正、第2試合は共和対内外貿易、第3試合はユニオン対逓友と決まった。その後、グラウンドルールの協議を経て、第1試合に出場する両チームが各10分間のシートノックを行った。大味小樽区長による始球式が行われ、10時15分、廣瀬球審（北海道帝国大学）が「プレイボール」を宣言して、第1試合の幕が上がった（『小樽新聞』1920年6月6日）。

札樽実業野球大会の決勝戦は、1920年6月16日、小樽ユニオン倶楽部対札幌鉄道の組合せで行われた。表2のように、35x対5のスコアで小樽ユニオン倶楽部が勝利し、第1回大会の優勝を飾った。

表２　第1回札樽実業野球大会　決勝戦試合結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
札	1	0	0	0	0	0	2	2	0	5
ユ	1	11	9	3	7	1	2	1	x	35

『小樽新聞』1920年6月17日付記事をもとに作成

以上のような札幌・小樽地区の実業野球大会の開催だけでなく、1920年から1922（大正11）年の間に小樽新聞社は、道内4つの地域で同じような実業野球大会を開催している。順に挙げると、①札樽実業野球大会（札幌、小樽地方のチームが参加）、②空知実業野球大会（空知支庁管内のチームが参加）、③中部北海道実業野球大会（上川、留萌、宗谷支庁管内のチームが参加）、④東北海道実業野球大会（十勝、釧路、根室、網走支庁管内のチームが参加）である。なお、渡島・檜山、日高・胆振地方では、同社主催の大会は開催されなかった。

『小樽新聞』を見る限り、これら小樽新聞社主催の4地域の実業野球大会がどのような位置づけで開催されたか、詳細は不明である。しかし、1922年に開催されたそれぞれの大会の参加資格を見ると、既に確認した札樽実業野球大会と同様に、参加資格を有するのは、それぞれの大会が参加対象とする地域の居住者で組織されたチームに限られ、学校チームに出場資格はなく、学籍を有する者は出場不可とされた（『小樽新聞』1922年5月14日、5月30日、6月14日、7月30日）。小樽新聞社は、あくまでも学生チームは対象外として、野球大会の開催を企画したのである。

これら4つの地域大会の相互関係や、優勝チームによる全道大会開催に向けた機運の形成などの詳細は、まったく不明ではあるが、結局、『小樽新聞』1922年9月5日記事で、「シーズン掉尾の大野球戦／本社主催優勝団争覇大会／九月廿三（土曜）廿四（日曜）両日／小樽公園グラウンドに於て／本社優勝旗保有の四代表団集る」という見出しで、第1回全道実業野球大会開催が報じられる。

こうして、北海道の4地域で誕生した小樽新聞社主催の各実業野球大会は、その地域の最強チームを決する大会から、その地域大会を制したチームが集まり、全道一のチームを決める大会へと発展したことになる。

1922年に開催された4つの実業野球大会で優勝をはたした4チームは、小樽ユニオン倶楽部（札樽大会優勝チーム、小樽）、万字社友倶楽部（空知大会優勝チーム、栗沢）、旭川巨人軍（中部北海道大会優勝チーム、旭川）、池田野球団（東北海道大会優勝チーム、池田）だった。

『小樽新聞』1922年9月22日付記事によると、当初の予定では、同年9月23日に第1回戦2試合を行い、翌24日に決勝戦を実施することとなっていた。大会第1日目は、午前9時会場集合、9時30分に4チームが優勝旗を先頭に入場を行い、第1試合2チームによる10分間ずつの練習の後、宮尾北海道庁長官の始球式が行われ、試合開始となっていた。

しかし、万字社友倶楽部、池田野球団の2チームが大会を棄権したため、23日の試合はすべて中止となり、改めて24日に小樽ユニオン倶楽部対旭川巨人軍の決勝戦を行うことになった（『小樽新聞』1922年9月23、24日）。

９月24日10時30分、奏楽隊を先導に巨人軍、ユニオン倶楽部の両軍が優勝旗を先頭に入場、観衆の万雷の拍手に迎えられてグラウンドを一周して本塁前に整列した。小樽新聞社太田代重役の開会の挨拶のあと、両チームの練習が行われた。宮尾北海道庁長官が上京中で不在のため、大味小樽市長代理による始球式が11時15分に行われ、ユニオン倶楽部の先攻で決勝戦が始まった。

試合は、表3のように、1回の表にユニオン倶楽部が4点を先制するなど、ユニオン倶楽部が優勢に試合を進め、結局、8対2のスコアで小樽ユニオン倶楽部が勝利し、優勝を果たした。

表3　第1回全道実業野球大会　決勝戦試合結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
ユ	4	0	0	0	0	2	1	1	0	8	10
巨	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	6

『小樽新聞』1922年9月26日付記事をもとに作成

全道大会の大優勝旗及び優勝カップがユニオン軍に授与されたほか、小樽市内梅屋運動具店寄贈による直径五尺の巨大な花輪と小樽野球協会寄贈の花輪も授与された。(『小樽新聞』1922年9月26日)

3　全道樺太実業野球大会開催へ

(1) 予選地区の変更

全道実業野球大会は、翌年の第2回大会から予選大会を実施し、各地区予選で優勝を果たした1チームが本大会に出場する方法に変わった。第2回大会では、表4のように、予選区を6地区に分けて実施された。その内訳は、表4のように、札幌・小樽地区を二つの予選区に分けて、新たに函館、渡島・檜山地方に予選区が設けられた。

全道大会として一本化されたことは、道内の社会人チームを刺激したようである。本大会への出場を目標に、各地のチームは練習に励み、また、新たなチームも次々に誕生した。第2回大会の予選大会には、6地区合計43チームが出場した（『小樽新聞』1923年5月25日）。

表4　第2回全道実業野球大会予選区

第1区	小樽及び後志支庁管内
第2区	札幌及び石狩支庁管内
第3区	函館及び渡島、檜山支庁管内
第4区	空知支庁管内
第5区	旭川及び上川、宗谷、留萌支庁管内
第6区	釧路及び釧路、十勝、網走支庁管内

『小樽新聞』1923年4月20日付記事をもとに作成

(2) 第8回全道樺太実業野球大会

予選地区は何度か変更が行われるが、第7回大会までは予選地区は北海道だけに設定されていた。1929（昭和4）年の第8回大会では予選区が見直されて北海道が9地区に細分化されたほか、新たに樺太が予選地区に加わり、合計10地区で予選大会が実施されることとなった。このため、大会名称は「全道樺太実業野球大会」に改称されたが、従来通り、小樽新聞社が主催となり、小樽公園グラウンドが本大会の会場となった。

なぜこの年の大会から、樺太に新たな予選区が設定され、樺太に拠点を置く社会人チームの出場が可能となったのか。『小樽新聞』も『樺太日日新聞』も、詳細は報じていない。小野（1940）も『小樽新聞』記事を引用するだけである。筆者の推測となるが、全道実業野球大会とほぼ同時期に始まった樺太全島野球大会（1921年第1回大会開催）が、この年には9回を数え、この間、樺太社会人チームの活躍や野球技術の向上、野球ファンの拡大など、樺太における野球熱の高まりなどを受けて、小樽新聞社が樺太チームの受入を決定したのではないだろうか。

このような新しい予選地区が設定され、同年6月16日開幕の第4区（岩見沢）の予選大会を皮切りに、7月下旬までに全10地区で予選大会が開催された。地区予選には総勢47チームが出場した。新たな予選区となった樺太では、7月20日に決勝戦が行われ、樺太逓信野球倶楽部が優勝を飾り、初の樺太代表となった（『小樽新聞』1929年7月21日）。

表5のように、予選大会には企業・官公庁を母体とするチーム、クラブチームが多数出場した。名前からの推測になるが、その内訳は、企業チーム9、官公庁チーム3、鉄道関係チーム9、クラブチーム26となる。北海道庁、樺太庁、鉄道局、炭鉱会社、銀行、各地のクラブチームが顔を連ねた。特に、第4区（南空知）、第9区（北空知）は、炭鉱会社チームやクラブチームが多数出場したことから、激戦区となった。

開幕に先駆けて、大会準備も進められた。小樽新聞社は、大会の観戦チケットとして、スタンド券を本社及び小樽梅屋運動具店で発売した。価格は、30銭（1日券）だった。また、150枚限定のネット裏特別席券も販売した。これは小樽新聞社本社のみで扱い、4日間通しのチケットで価格2円だった（『小樽新聞』1929年8月11日、12日）。

主将会議が、大会開幕の前日8月14日に小樽新聞社本社で開催された。この会議の席で組合せ抽選会が行われるとともに、審判員の選出、ルールの確認が行われた(『小樽新聞』1929年8月14日夕刊)。

表5　第8回全北海道樺太実業野球大会予選大会出場チーム

第1区（小樽）	農検倶楽部、築港駅、安田銀行野球部、小樽倶楽部
第2区（札幌）	札鉄野球部、北海道庁野球部、鉄腕倶楽部
第3区（函館）	商門倶楽部、曙倶楽部
第4区（南空知）	蹄光倶楽部、万字社友野球部、幌内野球倶楽部、住友奔別野球部、岩見沢野球倶楽部、アサヒ倶楽部、栗山野球倶楽部、岩鉄チーム、登川礦野球部、美唄三菱倶楽部
第5区（網走）	網走野球協会、HE倶楽部、ナインスター倶楽部
第6区（十勝、釧路、根室）	根室野球協会、帯広野球協会、厚岸野球協会
第7区（胆振、日高）	オーロラ倶楽部、浦河野球協会、様似野球団、プライマリー倶楽部、協成倶楽部、室蘭鉄道倶楽部、恒星倶楽部
第8区（旭川、名寄）	名鉄倶楽部、旭川鉄道倶楽部、大雪倶楽部
第9区（北空知）	鉄腕倶楽部、滝鉄倶楽部A、滝鉄倶楽部B、曙倶楽部、住友坂炭礦、三井砂川野球部、茂尻炭坑野球部、全深川野球クラブ
第10区（樺太）	樺太庁野球部、樺太庁鉄道、樺太庁逓信野球倶楽部、ノーザンスター

『小樽新聞』1929年6月2日付記事をもとに作成

第8回全道樺太実業野球大会は、1929年8月15日午前8時30分に、前回大会優勝の札鉄野球部を先頭に10チームの選手入場で幕を開けた（表6）。札鉄野球部から優勝旗が返還された後、小樽新聞社重役の挨拶、大会歌「見よ北国に光輝く」（表7）の吹奏とともに10チームの主将による大会旗掲揚が行われ、グラウンドルールの説明が行われた。第1試合の両チームの練習後、木田川小樽市長による始球式が行われ、9時30分に第1試合の開始となった。

表6　第8回全道樺太実業野球大会出場チーム

予選区	第8回大会出場チーム
第1区（小樽）	安田銀行野球部（小樽）
第2区（札幌）	札鉄野球部（札幌）
第3区（函館）	曙倶楽部（函館）
第4区（南空知）	万字社友野球部（栗山）
第5区（網走）	ナインスター倶楽部（野付牛）
第6区（十勝、釧路、根室）	根室野球協会（根室）
第7区（胆振・日高）	苫小牧オーロラ倶楽部（苫小牧）
第8区（旭川・名寄）	名鉄倶楽部（名寄）
第9区（北空知）	滝鉄倶楽部（滝川）
第10区（樺太）	樺太庁逓信野球倶楽部（豊原）

『小樽新聞』1929年6月2日付記事をもとに作成

表7　全道樺太実業野球大会歌「見よ北国に光輝く」

1　見よ北国に光り輝く
　紳士の誉れをになひてここに
　集ふ精鋭十区の若人
　力を試すは今日ぞ此の時
2　鉄腕うなりて熱球飛び交ふ
　空にも響く長棍一打
　若き血潮は早湧き立てり
　覇権握るは何処のナインぞ

『小樽新聞』1929年8月14日夕刊記事をもとに作成

第8回大会の試合組合せ、試合結果は、表11のとおりである。樺太から初の出場となった樺太庁逓信倶楽部が開幕戦に登場することとなり、しかも、激戦第9区代表の滝鉄倶楽部との対戦となったことから、多くの注目を集めた（『小樽新聞』1929年8月15日夕刊）。その樺太逓信倶楽部が開幕戦を制し、2回戦に進出した。

大会3日目の8月16日、樺太逓信対札鉄の対戦中に雨が降り出し、4回終了時点で降雨ノーゲームとなった。夜になって豪雨となり、17日の試合は不可能と思われた。翌17日は朝から雨が上がったため、小樽新聞社員総動員でグラウンドの排水に努めるとともに、揮発油を撒布し、火をつけて乾燥させる荒技でグラウンドコンディションを整え、再試合が行われた（『小樽新聞』1929年8月17日夕刊）。結局、18日も降雨のため準決勝2試合が順延となり、翌19日の早朝に再び「揮発油乾燥法」が実施され、試合が行われた（『小樽新聞』1929年8月20日）。準決勝2試合目のオーロラ倶楽部と札鉄野球部の対戦は、0対7xのスコアで札鉄野球部が勝利した。この試合で、札鉄野球部の佐々木投手がノーヒットノーランを達成した。

８月20日に行われた決勝戦は、曙倶楽部（第3区（函館））と札鉄野球部（第2区（札幌））の対戦となった。11対5のスコアで札鉄野球部が勝利し（写真8）、3年連続、4回目の優勝を果たした。

大会の首位打者は、曙倶楽部の永澤選手が獲得した。打率6割3分6厘（3試合で11打数7安打）、本塁打2本、三塁打2本、二塁打1本の活躍だった。

主催者としての小樽新聞社は、予選大会を含めて全試合の詳細を報じるなど、大会の模様を新聞の購読者に伝えた。同年8月7日から8月11日まで本大会に出場するチームの状況を記事にして紹介するなど、主催者の立場から野球大会を盛り上げた。

(3) 第9回大会

第9回大会を前に、新たな優勝記念カップとして、内閣総理大臣カップ、商工大臣カップ、新調された小樽野球協会カップが小樽新聞社に寄贈された。内閣総理大臣カップと商工大臣カップは、本大会の開幕直前の8月13日に小樽丸井今井呉服店の大ショーウィンドウに飾られ、大勢の小樽市民や野球ファンが観覧に集まった（『小樽新聞』1930年8月13日）。その他に、小樽市内の商店からも数々の記念品などが寄贈された（『小樽新聞』1930年8月14日）。

1930（昭和5）年8月14日午前8時30分、第9回全道樺太実業野球大会の入場式・開会式が始まった。第9回大会出場チームは、表8のとおりである。前年優勝チームの札鉄倶楽部から、本大会の会長である小樽新聞社平野重役に大優勝旗及び小樽野球協会カップが返還された。

表8　第9回全道樺太実業野球大会出場チーム

予選区	第9回大会出場チーム
第1区（小樽）	小樽倶楽部（小樽）
第2区（札幌）	札鉄野球部（札幌）
第3区（函館）	函館太洋倶楽部（函館）
第4区（南空知）	登川礦野球部（夕張）
第5区（網走）	野付牛三田倶楽部（野付牛）
第6区（十勝、釧路、根室）	根室野球協会（根室）
第7区（胆振・日高）	室蘭鉄道倶楽部（室蘭）
第8区（旭川・名寄）	名鉄倶楽部（名寄）
第9区（北空知）	滝川鉄道野球部（滝川）
第10区（樺太）	樺太庁鉄道倶楽部（豊原）

『小樽新聞』1930年8月9日付記事をもとに作成

この後、大会長の挨拶、池田秀雄北海道長官の祝辞があり、本大会へ優勝記念カップを寄贈した浜口雄幸内閣総理大臣及び俵孫一商工大臣の祝辞が代読された。前回大会で3年連続の優勝を果たした札鉄野球部に対して、記念カップが贈呈された。

開幕戦は、根室野球協会軍対室蘭鉄道倶楽部となった(表12)。池田北海道長官による始球式が行われ、多田球審のプレイボールによって開幕戦が始まった(『小樽新聞』1930年8月14日夕刊)。

第9回大会の新たな試みとしてラジオ放送が導入され、準決勝及び決勝戦ではラジオ放送が実施されることとなった(『小樽新聞』1930年8月13日夕刊)。

小樽市内の野球ファンのために、小樽新聞社本社など19ヶ所で試合経過が速報されるとともに、札幌市内でも18ヶ所でも速報されることになった『小樽新聞』1930年8月14日)。

決勝戦は札鉄野球部対函館太洋倶楽部の対戦となった。この試合は、4連覇がかかる札鉄、第5回大会以来の優勝がかかる函館太洋という強豪同士の組合せになった。「前日準決勝戦に本大会未曾有の人出を注された大群衆七万の記録は忽ちにして破られ実に無慮十万に達する大観衆」(『小樽新聞』1930年8月18日)と報じられたように、決勝戦当日、会場の小樽公園グラウンドには大勢の観衆が集まった。

決勝戦は、8月17日14時、札鉄先攻で幕を開けた。2回の裏に2点を先取した函館太洋だったが、3、4、5回に札鉄の逆襲を受けて、逆に2点をリードされる展開となった。5回裏に函館太洋が一挙4点を挙げて逆転に成功。その後は、札鉄の反撃を抑え、6x対4のスコアで函館太洋倶楽部が勝利した(写真10)。この勝利により、札鉄の4連覇を阻むとともに、第5回大会以来2回目の優勝を果たした。

(4) 第10回大会

第10回大会の事前準備としては、この年にも新たな優勝カップなどの寄贈があったほか、会場となるグラウンドの内野スタンド席及び外野席が整備され、内野スタンド席が30銭(小学生は15銭)、外野席が10銭で発売された(『小樽新聞』1931年8月14日)。

出場チームは表9のとおりで、第3区(函館)代表の函館OB倶楽部は、前年第9回大会優勝の函館太洋倶楽部のOBも所属するチームだった。第10区(樺太)の樺太庁鉄道倶楽部は、2年連続の出場となった。

1931(昭和6)年8月15日8時40分から開会式が開催された。9時40分、木川田小樽市長の始球式により、開幕戦の全網走軍対三井砂川野球部戦が始まった(『小樽新聞』1931年8月15日夕刊)。

表9　第10回全道樺太実業野球大会出場チーム

予選区	第10回大会出場チーム
第1区(小樽)	小樽野球協会(小樽)
第2区(札幌)	札鉄野球部(札幌)
第3区(函館)	函館OB倶楽部(函館)
第4区(南空知)	岩見沢鉄道倶楽部(岩見沢)
第5区(網走)	全網走軍(網走)
第6区(十勝、釧路、根室)	根室野球協会(根室)
第7区(胆振・日高)	苫小牧オーロラ倶楽部(苫小牧)
第8区(旭川・名寄)	旭川鉄道倶楽部(旭川)
第9区(北空知)	三井砂川野球部A(砂川)
第10区(樺太)	樺太庁鉄道倶楽部(豊原)

『小樽新聞』1931年8月11、14日付記事をもとに作成

表12のように、第1回戦で、札鉄野球部対函館OB倶楽部という優勝候補同士の対戦となり、札鉄が6対2で勝利した。第2回戦の第1試合では、苫小牧オーロラ倶楽部対岩見沢鉄道倶楽部の対戦が延長12回までもつれる展開となった。準決勝では、優勝候補札鉄野球部が初出場の旭川鉄道倶楽部に破れるという大会一番の番狂わせが起こった。

決勝戦は、優勝候補札鉄野球部を破った旭川鉄道倶楽部と、地元小樽の小樽野球協会の対戦となった。8月18日13時15分に始まった試合は、両チームの応援団、地元ファンの声援に後押しされて投手戦となり、7回が終わって両チームとも0対0のまま。8回の表、旭川鉄道倶楽部が0点に終わったのに対し、その裏、小樽野球協会は1アウト3塁の絶好のチャンスで、スクイズを敢行して1点を先制した。小樽野球協会は、9回表の旭川鉄道倶楽部の反撃を抑えて、1対0のスコアで初優勝を飾った。(『小樽新聞』1931年8月15日夕刊)。

4　盛り上がる野球ファン

前章で詳しく見てきたように、『小樽新聞』は全道樺太実業野球大会の模様を詳しく報じている。ここでは、第8回大会から第10回大会を通して、観衆や野球ファンの動向を概観したい。

『小樽新聞』を見る限り、第8回から第10回大会を通して、大会は大いに盛り上がったようである。例えば、『小樽新聞』では、第8回大会の模様を、「外野の平地は勿論丘の自然スタンドまで凄まじいもので人出実に三万を越える(略)野球技の進歩につれてか例年見られた悪野次も漸次影を絶ち今年は殆ど見られない最も喜ぶべき現象の一つであらう」(『小樽新聞』1929年8月16日「大会雑観」)、「札幌その他各地方からも続々汽車で押寄せてくる又当日は地元安田の対戦があり小樽のファンは早朝から一塁側のスタンドに陣取って声援に努め外野側も

二重三重に取まき美しいパラソルも多数交へて午前中早くも人出三万を算する」「一般ファンの野球技に対する理解は非常なものであるから就中著るしいのは婦人ファンの進出である」(『小樽新聞』1929年8月17日）などと報じるように、地元の小樽だけでなく、札幌やその他の地域から多くの野球ファンが集まり、多くの女性ファンも試合を観戦し、声援を送っていたようである。多数の出場チームの関係者も観戦に集まった。(『小樽新聞』1929年8月20日)。もちろん、小樽新聞社が主催した大会に関する自社の記事であるから、ここに現われる観戦者数の真偽は別にしても、老若男女を問わず、立ち見が出るほど大会は盛り上がったことが、記事から読み取ることができる（写真4〜7)。

８月のお盆の時期に開催される実業野球大会の会場に足を運び、試合を観戦する様子は、小樽市民にとっては、ごく見慣れた風景となっていたことが、第9回大会、第10回大会を伝える新聞記事からもわかる。

このように、実業野球大会に関心を向ける住民、野球ファンが増えていったことから、第9回大会からラジオ放送が開始された。また、小樽、札幌の市街に速報所が設けられるなど、会場で観戦できない野球ファンのためのサービスも増えていった。会場となった小樽公園内での実況放送も、会場には訪れたが試合を見られないファンのために提供されたサービスと言えよう。

年々増加する大会の観衆に対応するため、外野席が整備されたのは、第10回大会からで、それまでは、内野席を除くと、多くの観衆は立ち見だった。このような立ち見客の需要を見込んでか、「貸椅子」屋も登場した。「外野天然スタンドの大衆ファン相手に昨年から椅子代用として金五銭の俵の蓋売珍商売が現れたが今年は物価下落の影響か蓋に石油箱をつけて「金五銭也」の奉仕」(『小樽新聞』1931年8月17日）と、『小樽新聞』が報じている。

第9回大会では、野球ファンの関心は、第3区代表の函館太洋倶楽部に集まった。強豪・函館太洋倶楽部が第5回大会以来4年振りに予選大会に出場し、優勝を飾ったことで、本大会出場を果たした。函館太洋倶楽部は、必ずしも毎年全道樺太実業野球大会の予選大会に出場していたわけではなかったため、期待された名門チームの出場は、会場となる小樽でも大きな話題となった。さらには、準決勝では、地元の小樽倶楽部との対戦となり、小樽の野球ファンが盛り上がった（『小樽新聞』1930年8月16日、16日夕刊、17日)。

地元小樽のチームが登場する試合やその活躍に、小樽市民の期待が集まるのは当然のことではあるが、既に強豪チームとして名を馳せていた函館太洋倶楽部や札鉄野球部に対する注目も大きかった。

それだけに、第10回大会の準決勝戦で、優勝候補の札鉄野球部が旭川鉄道倶楽部に敗れるという番狂わせが起こると、観衆の興奮が爆発して、グラウンドは一種のパニック状態に陥ったようである。「閉戦のサイレンが今鳴り渡る此の刹那、一度大地に吸はれたどよめきは、たちまち火山の如く爆発して満場嵐の喚声ースタンドからは帽子、座布団、ステッキ、ありとあらゆる物が旭鉄ベンチへ雨と降る、群衆は物凄い鯨波を揚げて、スタンドから外野から、場外から決河奔流の猛勢でグラウンドへ殺到する〔略〕何千の群衆は一団となって殊勲の投手安部を胴上げにする」(『小樽新聞』1931年8月18日夕刊）と『小樽新聞』が報じたように、熱狂的なファンである・なしにかかわらず、会場に居合わせた観衆の興奮振りを読み取ることができる。

贔屓チームや強豪チームに対する熱狂的な応援、その裏返しの感情とも言える番狂わせへの期待、好プレーを期待しての声援、凡プレーに対するヤジなど、全道樺太実業野球大会の開催を通して、大きな意味での野球に対する関心・理解の向上を掲載記事から見て取ることができる。

5　おわりに

本稿では、1920年の札幌・小樽地区で開催された実業野球大会から、全道実業野球大会を経て、1929年の全道樺太野球大会へと大会規模が拡大していった過程を明らかにした。

表10のように、第1回大会から第10回大会までの出場地域別の優勝回数は、札幌4回、小樽3回、函館2回、歌志内1回となった。札幌の優勝はすべて札鉄野球部によるもので、第6回から第8回まで3連覇を果たした。この10年間の戦績を見る限りでは、札幌、小樽、函館の3強の時代だったと言えよう。

４つの地域で、社会人野球チームを対象に誕生した実業野球大会は、北海道や樺太に暮らす社会人たちを大い

表10　全道樺太実業野球大会　第1回〜第10回大会優勝チーム

第1回大会	1922年	小樽ユニオン倶楽部
第2回大会	1923年	歌志内坂炭礦
第3回大会	1924年	小樽スパルタ
第4回大会	1925年	札鉄野球部
第5回大会	1926年	函館太洋倶楽部
第6回大会	1927年	札鉄野球部
第7回大会	1928年	札鉄野球部
第8回大会	1929年	札鉄野球部
第9回大会	1930年	函館太洋倶楽部
第10回大会	1931年	小樽野球協会

『小樽新聞』1930年8月13日、1931年8月19日付記事をもとに作成。第1回大会から第7回大会までは、全道実業野球大会として開催。

に奮い立たせた。

当初は、4地域で実施されていた実業大会が全道大会に1本化され、さらに樺太のチームも出場可能になったことは、各チームが練習を重ね、本大会への出場、さらには優勝を目標に、技術力・組織力の向上につながる契機にもなった。

新しいチームが生まれては消え、再編成が繰り返されるなかで、函館太洋倶楽部や札鉄倶楽部のような名門・強豪チームの存在は、北海道・樺太の社会人チームの大きな「目標」となる点でも、大会を盛り上げるという点でも、欠かせなかった。

予選大会、本大会を通して、チームを支えて熱心に応援するファンがいた。大会会場となった小樽では、地元住民はもとより、各地からの応援団を含め、大勢の観衆がグラウンドに集まって選手のプレーに魅了され、声援を送り、歓声を上げた。この大会では、野球経験のない一般的な野球ファンの「観戦・応援」も、見慣れた光景となっていた。

社会人野球チームの盛衰と北海道・樺太の経済・産業のかかわりについて、課題を設定して調査を進めていきたい。

謝辞

『小樽新聞』の閲覧・複写にあたり、北海道立図書館北方資料室のご協力をいただきました。記して厚く感謝申し上げます。

参考文献

会田理人 2012.『樺太日日新聞』掲載樺太実業団野球関係記事：目録と紹介. 北海道開拓記念館研究紀要 40: 183–198.
会田理人 2015. 日本領南樺太の実業団野球大会. 北方地域の人と環境の関係史研究報告. pp. 177–200. 北海道開拓記念館.
会田理人 2017. 強者ぞろいの社会人野球. 北海道博物館第3回特別展「プレイボール！ －北海道と野球をめぐる物語－」ガイドブック. pp. 33–46.
小野庄次郎編 1940. 樺太野球史. 樺太野球連盟.
川西玲子 2014. 戦前外地の高校野球 台湾・朝鮮・満洲に花開いた球児たちの夢. 彩流社.
白野　仁 2007. 北の野球物語. 北海道新聞社.
函館太洋倶楽部 1978. 育め伝統－函館太洋倶楽部70年. 函館太洋倶楽部.
広瀬謙三編 1958. 日本の野球発達史 附録「北海道野球史」. 北海タイムス社.
毎日新聞社北海道支社 1992. 熱球・北の軌跡－社会人野球物語. 毎日新聞社北海道支社.
山本康三監修 2017. HOKKAIDO AMATEUR BASABALL TEAM GUIDE 2017. 日本野球連盟北海道地区連盟.
小樽新聞社 1920～1930. 小樽新聞.
樺太日日新聞社 1929. 樺太日日新聞.

表11　全道樺太実業野球大会　第8回大会
試合組合せ（一塁側対三塁側）及び試合結果
第8回大会（1929年）

【1回戦】

滝鉄倶楽部　vs　樺太逓信野球部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
滝鉄	0	0	0	0	0	0	1	4	0	5	5
樺太	2	0	0	2	1	0	4	0	x	9	7

万字社友野球部　vs　札鉄倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
万字	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
札鉄	0	1	1	1	0	2	0	0	x	5	9

【2回戦】

曙倶楽部　vs　根室野球協会

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
根室	0	0	0	0	0	5	4	0	0	9	8
曙	2	0	0	0	0	4	3	2	x	11	10

安田銀行野球部　vs　名鉄倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
安田	0	2	0	0	1	0	1	5	1	10	5
名寄	0	4	1	3	0	3	6	1	x	18	13

オーロラ倶楽部　vs　ナインスター倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
ナ	1	0	1	0	1	0	0	1	0	4	7
オ	0	0	2	0	0	0	2	1	x	5	4

樺太逓信野球部　vs　札鉄倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
札鉄	2	0	0	0	1	2	0	0	0	5	7
樺太	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3

【準決勝】

名鉄倶楽部　vs　曙倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
曙	1	0	2	0	0	3	0	3	0	9	9
名鉄	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	6

オーロラ倶楽部　vs　札鉄倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
オ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
札鉄	1	1	1	0	0	3	1	0	x	7	9

※札鉄・佐々木投手がノーヒットノーランを達成

【決勝】

曙倶楽部　vs　札鉄倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
札鉄	0	2	4	0	0	1	4	0	0	11	15
曙	2	1	0	0	0	0	0	2	0	5	4

『小樽新聞』1929年8月15日夕刊～21日付記事をもとに作成

表12　全道樺太実業野球大会　第9回・第10回大会　試合組合せ（一塁側対三塁側）及び試合結果第8回大会（1929年）

第9回大会（1930年）　試合結果

【1回戦】

根室協会　vs　室蘭鉄道

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
根室	0	0	0	1	0	0	4	1	1	7	14
室蘭	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	4

札幌鉄道　vs　滝川鉄道

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
札幌	4	0	0	3	3	2	0	2	1	15	12
滝川	0	0	3	0	0	0	3	0	0	6	8

【2回戦】

三田倶楽部　vs　函館太洋倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
函館	6	5	4	4	2	2	0			9	16
三田	0	1	0	0	0	0	0			0	6

小樽倶楽部　vs　登川炭礦

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
小樽	0	0	1	3	5	0	0	3	3	15	9
登川	1	0	0	1	0	0	1	1	0	4	8

名寄鉄道　vs　根室協会

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
名	0	2	1	0	1	0	0	0	3	7	9
根室	1	0	0	4	0	5	1	2	x	13	10

樺太庁鉄道　vs　札鉄野球部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
札鉄	2	0	3	0	2	0	1	0	0	8	8
樺太	1	0	0	0	0	1	0	0	1	3	9

【準決勝】

函館太洋倶楽部　vs　小樽倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
函館	3	0	0	0	1	0	0	3	0	7	8
小樽	0	1	0	0	0	2	0	1	0	4	10

根室協会　vs　札鉄野球部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
根室	1	0	0	1	0	1	0	4	2	9	10
札鉄	1	2	2	0	1	0	3	4	5	18	16

【決勝】

札鉄倶楽部　vs　函館太洋倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
札鉄	0	0	2	1	1	0	0	0	0	4	9
太洋	0	2	0	0	4	0	0	0	x	6	11

『小樽新聞』1930年8月14日夕刊～18日付記事をもとに作成

第10回大会（1931年）　試合結果

【1回戦】

全網走軍　vs　三井砂川野球部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
三井	1	0	4	2	2	0	0	0	4	13	10
網走	0	0	0	1	1	1	0	0	0	3	4

館OB倶楽部　vs　札鉄野球部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
函館	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	9
札鉄	2	2	0	1	1	0	0	0	x	6	9

【2回戦】

オーロラ倶楽部　vs　岩見沢鉄道倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	H
岩鉄	2	0	0	1	0	1	0	2	2	0	0	1	9	12
オ	2	0	0	0	1	0	1	4	0	0	0	2x	10	11

小樽野球協会　vs　根室野球協会

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
小樽	0	0	0	1	0	0	3	0	0	4	2
根室	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	6

樺太庁鉄道倶楽部　vs　旭川鉄道倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
旭川	3	0	0	0	0	1	0	2	3	9	8
樺太	0	0	3	0	0	0	3	0	0	6	9

三井砂川野球部　vs　札鉄野球部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
三井	0	0	1	0	2	0	0	0	1	4	6
札鉄	0	3	1	0	2	7	2	1	x	16	21

【準決勝】

オーロラ倶楽部　vs　小樽野球協会

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
オ	0	0	4	0	0	0	1	0	0	5	9
小樽	0	3	3	0	0	2	0	4	x	12	11

旭川鉄道倶楽部　vs　札鉄野球部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
旭川	0	0	3	0	2	0	0	0	0	5	9
札鉄	1	1	1	1	0	0	0	0	0	4	5

【決勝】

小樽野球協会　vs　旭川鉄道倶楽部

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	H
旭川	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
小樽	0	0	0	0	0	0	0	1	x	1	6

『小樽新聞』1931年8月15日夕刊～19日付記事をもとに作成

写真1　第8回全道樺太実業野球大会　大会スケッチ（『小樽新聞』1929年8月16日　滝鉄対樺太逓信）

滝鉄対樺逓の戦、ラッキーセブンの出来事、滝鉄の捕手高野君二塁から三塁へスチールを試みる各ベースを乱気になって駈けたので完全に疲れ果て、三塁ではスライドが出来ず御覧の通り四つん這ひ、でもどうやら生きて一点を入れたとは勇ましきかなですね。

写真2　第8回全道樺太実業野球大会　大会スケッチ（『小樽新聞』1929年8月16日　滝鉄対樺太逓信）

これも御同様セブンの裏〔滝鉄〕芦田〔投手〕がノックアウトされた満塁の後を引継いだ第二投手の宮崎君肩が定まらぬせいか、四球、四球と出して忽ち夏向きなところてん屋を開業する御馳走になった樺逓はさぞ涼しかったことだらう…と思ふんです。

写真3　第8回全道樺太実業野球大会　大会スケッチ（『小樽新聞』1929年8月17日　ナインスター対オーロラ）

ナインスター対オーロラの試合、オ軍の捕手朝妻君のユニフォームは汗と土とのコンビネーションよろしきを得て、いやはやキタネエこと無類、そこへもって来て伊藤球審の服が特別白いので甚だ目立つ、なにがさて、口のキタナイことでは、朝妻君のユニフォーム以上の見物「オーイそのキタネエの、しっかり勝って呉れ、勝ったら上着位は買ってやるぞ…」へえ御親切様…。

写真4　第8回全道樺太実業野球大会　スタンドの観衆（『小樽新聞』1929年8月16日）

写真5　第8回全道樺太実業野球大会　日傘をさした女性も観戦（『小樽新聞』1929年8月20日）

写真6　第8回全道樺太実業野球大会　歓声を上げるファン（『小樽新聞』1929年8月18日）

写真7　第8回全道樺太実業野球大会　電柱や垣根の上で観戦するファン（『小樽新聞』1929年8月16日夕刊

写真8　第8回全道樺太実業野球大会　優勝した札鉄野球部ナイン、閉会式の模様（『小樽新聞』1929年8月21日）

写真9　第9回全道樺太実業野球大会（左下は、貸腰かけ屋の様子）（『小樽新聞』1930年8月15日）

写真10　第9回全道樺太実業野球大会決勝戦の模様、スコアボード　（『小樽新聞』1930年8月18日）

NOTES AND SUGGESTIONS

Zendo Karafuto Baseball Tournament

Masato AIDA

This article describes how amateur baseball tournaments in Hokkaido began and progressed from mid-Taisho (1912-1926) to early Showa (1926-1989), and focuses on the "Zendo (All Hokkaido) Karafuto Baseball Tournament", which was held in Hokkaido and included the Japanese territory of Karafuto (South Sakhalin). As a basic resource, the *Otaru Newspaper*, which was published during that period, was used.

The first amateur baseball tournament between non-professional teams (company teams, club teams) in Hokkaido took place in 1920. In that year, the Sapporo-Otaru Amateur Baseball Tournament was held in Otaru the first time, under the sponsorship of the Otaru newspaper. From 1920 to 1922, several tournaments in addition to the Sapporo-Otaru Amateur Baseball Tournament were held throughout four regions. In 1922, the Zendo Amateur Baseball Tournament was open to champion teams in these territories for the first time. From 1923, preliminary tournaments were held, with the winning teams participating in the Zendo tournament.

In 1929, a preliminary region was set up in the Japanese territory of Karafuto. Baseball teams from Sakhalin could also participate in both the preliminary and main tournaments. The tournament name was also changed to Zendo Karafuto Amateur Baseball Tournament. Ten teams which won the regional preliminary rounds participated in the main tournament.

Masato AIDA : Folk Life and Industrial History Group, Research Division, Hokkaido Museum